

1.はじめに

おはようございます。

前回、神の臨在にふれる礼拝その1として、カインとアベル、アブラハムとイサクの記事を通していくつかの点について一緒に学びました。アベルは羊の初子の中から最上のものをささげ、アブラハムは最愛の子イサクをささげることを通して、私たちは何をささげればよいのか、また私たちはどのように神に近づけばよいのか、ということ学びました。前回のお話のポイントとしては、

- 1)礼拝とは『神に近づくこと』であり、『神とともにいること』
- 2)旧約聖書の時代は神に近づくためにいけにえが必要であった
- 3)イエス・キリストのあがないにより、私たちが神に近づくためのいけにえは不要となった
- 4)私たちの奉仕が神を礼拝することであり、神に対するささげものである

ということでしたが、実はこのようなポイントを字面だけで理解しても私たちの霊的な生活、礼拝にはよい影響を与えることが難しく、礼拝が儀式化してしまう可能性があることとお話ししました。礼拝の目的は、儀式を執り行うことではなく、神にお会いすることです。出エジプト記 29:42 に教えられている、旧約聖書における礼拝の場所は「会見の天幕」という名前と呼ばれました。

出 29:42 これは、主の前、**会見の天幕**の入口で、あなたがたが代々にわたって、絶やすことのない全焼のいけにえである。その所でわたしはあなたがたに会い、その所であなたと語る。

神に会うことを目的として、神はユダヤ人に礼拝を示されました。この点は大変重要です。礼拝とは宗教的儀式ではなく、神にお会いし、神のみことばを聞くための時間です。私たちは、どのような場所であっても、どのような時間であっても、神にお会いすることができる立場に変えられたのです。

さて、ユダヤ人に与えられた神の祝福は大変大きなものでしたが、私たちはユダヤ人に与えられた祝福よりも大きなもの、偉大なものをいただきました。ユダヤ人に与えられたものと私たちに与えられたものの比較を、ヘブル書の記者はこのように教えています。

8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。

幕屋、すなわち会見の天幕が天にあるものの「写しと影」であるなら、私たちには、天にあるもの、すなわち「写しと影」の本体をいただいていることがわかります。今日から何回かにわけて、**私たちにとっての会見の天幕とは何か？**ということについて考えてみたいと思います。言い換えれば、**私たちが神とお会いすることに焦点を絞って、いくつかの角度から学ぶ**ということになります。

2.幕屋（会見の天幕）としての御子

まず、ヨハネの福音書 1:14 を開きましょう。

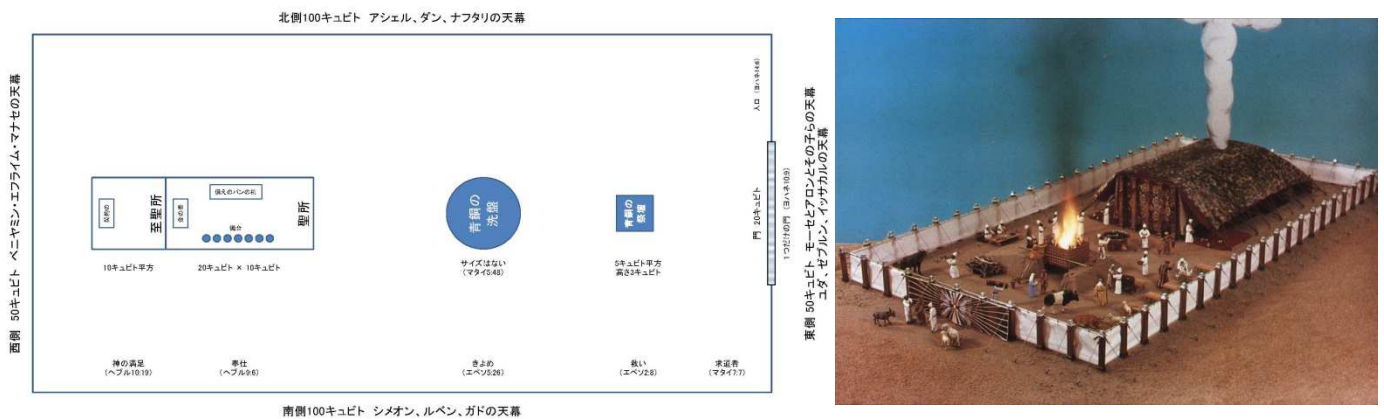
1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

今日はこの後、神が人となってくださったことについて考えたいと思いますが、まずこの聖句にある「住まわれた」について、一緒に考えたいと思います。

この「住まわれた」というのは、まさしく御子が私たちと同じ肉体を持って現れて下さり、ヨハネだけでなく当時の人間社会に住んでくださったということですが、ギリシャ語では「私たちの間に幕屋を張られた」または「イエスの肉体という天幕を張られた」という意味があるようです。先ほどお読みしたヘブル人への手紙 8:5 をもう一度開きたいと思います。

8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。

神は、モーセに対して幕屋を建て、その中に青銅の祭壇、青銅の洗盤、聖所、至聖所を作るように命じました。画面は、上から見た幕屋の図ですが、旧約聖書に定められたさまざまな規定や儀式については、興味がある人にとってはおもしろいテーマですが、そうでなければ考えたこともない！ということかもしれませんので、今日はすこしだけ一緒に考えたいと思います。



(簡単に平面図の説明)

さて、この幕屋は、天にあるものの写しと影であったことが教えられています。ヨハネの福音書 1:14 によると、この幕屋は、実はイエスそのものであり、イエスの型であることがわかります。すなわち、ヘブル書 8:5 に教えられている天にはこの天幕の実物があり、モーセはそれをかたどった幕屋を、この地上でその写しと影として作った、ということになるかと思います。次回以降、この幕屋について少し学ぶ機会を持つことができたいと思いますが、今日は旧約聖書に教えられている幕屋、会見の天幕がイエスの型であったことを覚えていただければと思います。

さて、私たちが神とお会いするために、最も重要な「神がしてくださったこと」と言えば、やはり神のひとり子である御子を私たちの世界にお遣わし下さったことです。先ほど開きました、ヨハネの福音書 1:14 には、

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

と教えられています。ヨハネは、私たちにとって「見えない神」が見える形を取られた、すなわち人となってくださったこと、また、見える形を取られただけでなく、私たちの間に住まわれた、すなわち私たちと関係のある存在になってくださったことについて教えました。では、神である御子が見える形を取ってくださったことから考えてみたいと思います。

3. 見える神

旧約聖書では、はじめの人であるアダムは、エデンに置かれた園で生活していたと教えられています。彼らがどのように神と交わっていたのかはわかりませんが、彼らは神からの声を直接聞いていました。ところが、蛇にそそのかされて、食べてはいけないと命じられていた園の中央の木から食べてしまったことで、彼らは園から追い出され、もはや園には戻ることができなくなった、というのが創世記のはじめに教えられています。実は、聖書はアダムが「神を見ていた」とはっきりと教えているわけではありませんが、少なくとも自由に神と交わることができる環境であったエデンの園から追放されたことで、神と自由に交わることができなくなったと理解することができます。

昔、私たちのコミュニケーションは「見える」相手とのコミュニケーションということが前提でした。しかし、手紙や電話、最近ではインターネットやSNSという技術によって、見えない相手とのコミュニケーションがどんどん発達してきました。特に、若い世代では見えない相手とのコミュニケーションの方が多いのかもしれませんし、見える相手とのコミュニケーションよりも見えない方がやりやすい時代になってきているかもしれません。

仕事においても、コミュニケーションの手段は直接会う、電話で話す、メールでやり取りするという3つの方法になると思いますが、重要な用件については、やはり直接会ってお伝えすることが多いと思います。それぞれの手段には良し悪し、メリットとデメリットがありますが、直接会うことができない場合、その相手が重要であればある程、コミュニケーションが難しくなることが多いと思います。逆に言えば、顔を見ることなくコミュニケーションを取り続けても問題がない関係というのは、大した関係でない場合か、特殊な場合だけだろうと思います。コミュニケーションの入り口が目に見えない状態であっても、その人との関係が重要になればなる程、直接会うことが必要になってきます。

人にとって、神が重要な存在であれば、やはり直接お会いすることが重要だろうと思います。私たちにとって、今、この目で神を見ることはできないかもしれませんが、神は私たちに聖霊を与えてくださったことを通して、神との直接的なコミュニケーションを取ることができるようにしてくださいました。また、目で見ることがなくても、聖霊は祈りや聖書、礼拝を通して、神を私たちの中にイメージさせてくださることを経験された方もたくさんいらっしゃると思います。そのイメージは人によって違うと思いますが、そのイメージが聖霊によって描かれたものであれば、どのような違いがあろうと、そのイメージを通して私たちは力や励まし、慰め、導きをいただくことができるのです。

何よりも、イエスが人となって、見える形で現れてくださったことにより、新約聖書の記者たちは目に見える神がどのような方で、何をされて、何を語られたのかについて書き留めました。私たちにとっては2000年近く前のことですが、聖書を通して大変近く、親しくイエスのことを感じることは、新約聖書の記者たちがイエスを見ることができたからです。彼らが実際に見たイエスを書き留めたからこそ、私たちはイエスをより具体的に学ぶことができるのです。アダムの失敗により、十分に交わることを、イメージすること、そし

て直接見ることが断たれた状態から、イエスによって、そして与えてくださった聖霊によって、神と十分に交わり、イメージし、直接見た結果としての新約聖書を通して神を学ぶことができるようになってきていることは、大変大きな恵みであることを今日再認識したいと思います。

また、御子は私たちの間に住んでくださいました。

4. 私たちの間に住まわれた神

見ることはできるが、手に届かないものがあります。例えば、高級な美術品や工芸品は、見ることはできますが、手に取って触ることはできません。また、著名な人もそうかもしれません。おそらく、今日集まってくださった方々の中に、日本であれば安倍首相、アメリカであればトランプ大統領にお会いした方はいらっしゃるかと思います。安倍首相であれば、場合によってはどこかで見かけたことがある方がいらっしゃるかもしれませんが、トランプ大統領になると、見かけることすらない方だろうと思います。

見ることができるだけでも、私たちにとっては「見えない」状態よりもずっと理解しやすくなりますが、その方と直接お話しすることができるなら、その方に対する理解が深まります。しかも、一生に1回しか会えないような人よりも、同じ空気を吸い、同じ水を飲み、同じ環境で生活している人の方が、理解が深まることは言うまでもないと思います。

ヨハネは、イエスが人となってくださっただけでなく、私たちの間に住まわれた、と教えました。事実、イエスは、ヨセフとマリヤの子としてこの地上に誕生し、30年間彼らとともに生活されました。また、30歳になられたときに、人々の前に出て教え始められましたが、イエスは多くの時間を大勢の人たちとともに過ごされました。同じヨハネが書いた、ヨハネの手紙第1の冒頭で、ヨハネはこのように教えています。

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目を見たもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのこばについて、

ヨハネは、イエス・キリストが「単なる人」ではなく、神のひとり子であることを信じていましたが、彼は私たちとは違い、実際にイエス・キリストの時代に生き、イエス・キリストとともに生活した人でした。そのヨハネは、イエスに対する自分自身のアプローチを5段階に分けて表現しました。

まず、彼はイエスが「初めからあったもの」と教えています。これは、イエスが神であることを象徴しています。ヨハネがイエスに出会った瞬間からではなく、神の永遠のご計画の中であって自分自身も「計画されていた」、すなわち偶然ではなく、神のご計画の中に、自分自身も組み込まれていたことを、イエスを通して知りました。自分自身は有限の存在であるが、イエスは違う。この方は天地の創造主であり、すべてのこと、すべてのものの初めから存在している方、無限の存在であることを示しました。

2番目は「私たちが聞いたもの」と教えています。彼は実際、イエスから直接、イエスの話を聞いた人物の一人です。ただし、彼の『聞き方』は時間とともに変わっていきます。まず、彼は漁師としてガリラヤ湖で魚を取っていたとき、イエスは宣教を開始されました。そのときは、遠くの方で「先生」のような方が話をしているのを見て、遠くから聞いていただけです。しかし、イエスがガリラヤ湖でヤコブとヨハネに声をかけられ、弟子となってからは、自分自身の師の話として、イエスの話を聞いていました。やがて、イエスは十字架にか

けられますが、彼はイエスの母とともに十字架の下にいて、イエスの最後の言葉を聞きます。イエスが息を引き取られ、葬られ、よみがえられた後、再びイエスに出会い、イエスの話を聞きます。彼は、遠くで話されているのを聞いている状態から、少しずつイエスに近づき、イエスに最も近いところで話を聞くようになりました。近いというのは物理的な距離だけではなく、精神的な距離も同じように近くなっていきました。ただ、聞こえていただけではなく、またただ耳から音として聞いていただけではなく、イエスの話、イエスの言葉の深さを徐々に知り、それを味わいながら聞いていたのです。

3番目は「目で見たもの」です。見えない神が見える形をもってヨハネの前に現れて下さったのですが、彼は自分自身の目でイエスを見たことを証言しています。人間が人間を見るなら、見えて当たり前ですが、ヨハネはイエスが十字架にかかり、葬られ、よみがえられたことを通して、この方が人となられた神であることを理解し、信じ、受け入れました。見えるはずのない、また見るのが許されない神を、自分の目で見るのが許されたことをヨハネが理解したのは、イエスが本当に神の子であることを信じ、受け入れたときです。見えるはずのない、見るのが許されていない神を、自分の目で見たことを知ったときに、彼はどれほど驚いたことでしょうか。はじめの人アダム以降、誰もまともに見ることはおろか、一瞥すらできなかった方を、彼は見ていたのです。

4番目は「じっと見」です。見ただけではなく、見るができただけではなく、ヨハネは人の子をじっと見ていました。この「じっと見」は、別の訳によると「じっと見つめ」と訳されています。じっと見る、じっと見つめることには、見る人の意思が反映されていると思います。ただ見ているだけではなく、意思をもって見る。意思をもって見つめる。ヨハネはどのような意思を持っていたのでしょうか。

ヨハネ自身は漁師でした。ヨハネ以外のイエスの弟子は、取税人や熱心党员、漁師という職業だった人たちで、後にイエスの使徒となるパウロや、イエスと問答し、イエスの埋葬の手伝いをしたニコデモのような律法学者ではありません。イエスの弟子が律法をどのように理解していたかはわかりませんが、イエスの時代では、決して尊重されてはいなかった人たちを弟子にして、イエスは宣教活動を行っていました。イエスが語る言葉、イエスの話は、しばしば律法学者たちとの論争となり、彼らはイエスを殺そうと画策する程でした。ですから、イエスと行動を共にしていた弟子たちにとっても、命が狙われるような危険といつも隣り合わせになっていたのです。しかし、イエスの言葉、イエスの話を聞き、一方でそれに反論する律法学者の話を聞いて、ヨハネはイエスが一体何者なのか？ということを確認しなければならなかった、その確証を得る必要があったと思います。イエスを理解するために、イエスが話す言葉を理解するために、彼はいつもイエスをじっと見なければならなかった。見つめなければならなかった。それくらい、彼はイエスのことをよく理解していた、ということを書いたのかもしれません。

最後に「手でさわったもの」です。3番目の「目で見たもの」と同じように、人であればいくらでもさわることができるのですが、神であれば見ることはおろか、さわることなどできるはずがありません。しかし、実際にイエスをさわることができるほどの関係であったことを、ヨハネは告白しました。さわることができるのは関係性の近さだけではなく、距離の近さも表現しています。実際、神は私たちが見ることもさわることもしないような、はるか彼方にいらっしゃる方ではなく、私たちの近くにいらっしゃる方であることを、ヨハネはここで示したかったように思います。イザヤ書 59:1 には、逆説的な教えとしてこのように教えられています。

59:1 見よ。【主】の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。

59:2 あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、

聞いてくださらないようにしたのだ。

咎や罪がなければ、神は救うことができるほど近くにおり、イスラエルの声、イスラエルの叫び声が聞こえるところにいるのだ、とイザヤは教えました。神は近くにおられるのに、仕切りとなるものがあるために、神との距離が遠くなってしまったかのような状況になってしまっている。このように教えられていることを前提に、ヨハネの告白、手でさわったもの、を考えるなら、それまでに解決されていなかった罪の問題が解決され、実際に手が届くところに神がいらっしゃる、また本当にふれることができる関係性になったことを言いたかったことがわかります。

いかがでしょうか。ヨハネの告白を通して、神が私たちの間に住まわってくださったことを、彼自身が体感したことが理解できると思います。

私たちが神とお会いするために、最も重要な「神がしてくださったこと」として、神のひとり子である御子を私たちの世界にお遣わし下さったことを、ヨハネの福音書 1:14 から少し学びました。御子がこの世に来られたことにより、私たちはこの方を見ることができ、またこの方とともに住むことができるようになりました。もう一度、ヨハネの福音書 1:14 を開きましょう。

1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

旧約聖書の時代、特に律法の時代は、定められた方法により、選ばれた人たちだけが神の前に出て、神の御声を聞くことができました。しかし、終わりの時代、すなわち私たちの時代においては、神に贖われた者として、自由に、誰でも神の前に進むことができ、聖霊を通して神にお会いすることができるようになりました。その道を開いてくださったのは、御子イエス・キリストです。この方は神であられるのに、私たちが見ることのできる形を通して、私たちがともに住むことができる方として、私たちにご自身を示し、事実私たちとともに住んでくださる方となってくださいました。

私たちに求められているのは、そのために何かをするのではなく、その事実を受け入れ、そのように生きることだけだと思います。くどいようですが、私たちに与えられたこの素晴らしい恵みと祝福は、私たちがこれから何かの努力をして徐々に得ていくものではなく、既にこのような立場が与えられていることをしっかりと理解したいと思います。

5.見える方、ともに住まわれた方は、どこを目指されていたのか

さて、今日、皆様とご一緒に、神は見える方となってくださった、また私たちとともに住まわれたことについて学びました。しかし、もし神が見えること、一緒に住むことがゴールであるなら、これ以上のことは必要ではなかったはずですが、ところが、イエスは、見える形で現れて下さり、人とともに住まわってくださいましたが、その状態を延々と続けられるのではなく、自ら地上でのご生涯に終止符を打たれました。それが、十字架です。

天にある幕屋そのものである御子ご自身が、見える形で私たちの間に住まわれることだけでは解決できない問題がありました。それは、ヘブル人への手紙 9:1-10 に教えられています。

9:1 初めの契約にも礼拝の規定と地上の聖所とがありました。

9:2 幕屋が設けられ、その前部の所には、燭台と机と供えのパンがありました。聖所と呼ばれる所です。

9:3 また、第二の垂れ幕のうしろには、至聖所と呼ばれる幕屋が設けられ、

9:4 そこには金の香壇と、全面を金でおおわれた契約の箱があり、箱の中には、マナのはいった金のつぼ、芽を出したアロンの杖、契約の二つの板がありました。

9:5 また、箱の上には、贖罪蓋を翼でおおっている栄光のケルビムがありました。しかしこれらについては、今いちいち述べることはできません。

9:6 さて、これらの物が以上のように整えられた上で、前の幕屋には、祭司たちがいつもは行って礼拝を行なうのですが、

9:7 第二の幕屋には、大祭司だけが年に一度だけは入ります。そのとき、血を携えずにはいるようなことはありません。その血は、自分のために、また、民が知らずに犯した罪のためにささげるものです。

9:8 これによって聖霊は次のことを示しておられます。すなわち、前の幕屋が存続しているかぎり、まことの聖所への道は、まだ明らかにされていないということです。

9:9 この幕屋はその当時のための比喩です。それに従って、ささげ物といけにえとがささげられますが、それらは礼拝する者の良心を完全にすることはできません。

9:10 それらは、ただ食物と飲み物と種々の洗いに關するもので、新しい秩序の立てられる時まで課せられた、からだに關する規定にすぎないからです。

また、10:1-4 にはこのように教えられています。

10:1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。

10:2 もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずで。

10:3 ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。

10:4 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。

旧約聖書に示された幕屋では、人が神にささげる礼拝は完全なものにはならず、そして人の罪の問題も解決しない、ということが教えられています。特に、9:8 が重要かと思えます。前の幕屋、すなわち旧約聖書に示されている幕屋が存続している限り、まことの聖所、すなわち天にあるまことの聖所への道は明らかにされていない、この明らかにされていないという部分は、ギリシャ語の聖書によると「開かれていない」という意味もあるようです。ですから、旧約聖書の幕屋が存続している間は、本当の聖所に至る道が開かれていないということになります。

では、どうすればよいのか。何がこの問題を解決することができるのか。答えはシンプルです。旧約聖書に規定されている幕屋を廃止して、完全な幕屋に進まなければならない。その完全な幕屋とは何か？この完全な幕屋こそイエス・キリストである、と聖書は教えています。ですから、イエスは見える神として、一緒に住まわれる神としての立場を、この地上に延々と続けられるのではなく、旧約聖書に規定されている幕屋を廃止しなければならなかった。では、その幕屋をどこで廃止されたのか。それが十字架です。

最後にマタイの福音書 27:45-51 を開きたいと思えます。

27:45 さて、十二時から、全地が暗くなって、三時まで続いた。

27:46 三時ごろ、イエスは大声で、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれた。これは、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という意味である。

27:47 すると、それを聞いて、そこに立っていた人々のうち、ある人たちは、「この人はエリヤを呼んでいる」と言った。

27:48 また、彼らのひとりがすぐ走って行って、海綿を取り、それに酸いぶどう酒を含ませて、葦の棒につけ、イエスに飲ませようとした。

27:49 ほかの者たちは、「私たちはエリヤが助けに来るかどうか見ることにしよう」と言った。

27:50 そのとき、イエスはもう一度大声で叫んで、息を引き取られた。

27:51 すると、見よ。神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた。そして、地が揺れ動き、岩が裂けた。

イエスの十字架の記事ですが、イエスが息を引き取られた直後に、神殿の幕が上から下まで真っ二つに裂けた、と教えられています。この神殿の幕は、幕屋の聖所と至聖所との間にあった幕ですが、神はこの至聖所で大祭司と会うことを約束されていました。神は、確かにアブラハムの子孫に対して、この会見の天幕を通してご自身を現わすことを約束されましたが、それは年に一度、しかも大祭司に対してだけ現わされたのです。その幕屋を廃止しなければ、今、私たちに与えられている自由な礼拝、賛美への道は開かれないのです。

本日はここまでとさせていただきます。次回はイエス・キリストの十字架について一緒に考えたいと思います。十字架は確かに私たちの罪を赦すために大変重要なものでしたが、罪を赦すためだけではなく、一緒に考えたいと思います。

では、祈りましょう。